
NEVER MIND

華月 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEVER MIND

【Nコード】

N0532B

【作者名】

華月 凜

【あらすじ】

幼なじみで仲良しの三人、涼と葉月と慶。いつだって三人でいるのが当たり前でこれからもずっとそうだと思ってた・・・

序章

いつだって三人でいるのが当たり前で
これからもずっとそうだと思ってた・・・

暑い暑い夏・・・

蝉の声がうるさく鳴り響き、晴れ渡った空に
俺達はいた。

小さな時から夏が嫌いな俺とあいつ、夏が大好きな君が・・・

夏になるといつも君は笑って、遊ぶ計画を俺達
二人に運んでくる。

でもそれをうんざりしながら、聞いている俺らを君は怒る。
それはもう夏の日課だったよな・・・

でも高校最後の夏にそれはもう過去の思い出に
なった。

俺達は泣いていた

声が枯れるほど・・・

第一章：穏やかな朝

高校二年 春 -

「涼〜♪慶〜♪」

見て〜桜もう咲いてるよ〜！」

始業式の朝

通学路には桜が満開に咲いていた。
でも俺達にとつては見慣れた景色。
なのに、葉月ときたら・・・

「あ〜すごいね〜・・・。」

「涼！何そのど〜でもよさげな態度は！
桜が泣いてるよ！？」

やっぱこいつバカだ。
桜は泣くんじゃねえ、
散るんだよ。

しかも・・・慶なんか答えるのも面倒くさいのか
聞こえないフリしてるし
俺だって朝っぱらから 葉月に付き合うのも嫌だけど、どっちかが
相手にしないとうるさいしな〜。

でもなんだかんだ言っても可愛いんだよね〜
葉月は。

小さな時から生き物に優しい目を向けて、花が咲く事に喜びを感じ、動物が亡くなると涙を流し悲しむ。

そんな当たり前の事ができる葉月を羨ましく思ったりもした。

いつからだろう・・・

葉月を幼なじみとしてではなく、`女`として見るようになったのは・・・

きつとあの雨の日からだろう・・・

中学の時小さい時から飼っていた葉月の犬が突然いなくなった日。

葉月は必死で走り回って探し、結局見つけた時にはストレスの溜まった学生らしき男に殴り殺されてぐったりしている所だった。もちろん男は逃げ出し、犬のミルクは血まみれで死んでいた。

その頃俺は葉月を探していた。

その時、近所の公園あたりで犬を抱えながらフラフラと歩いた葉月を見つけ駆け寄った。

葉月は俺を見るなり泣き崩れ、雨に濡れ、俺にしがみついた。そんな葉月を見て俺は自分の感情に戸惑いを感じていた。

悲しいはずなのに、すごく葉月にキスをしたくて、壊れるくらい抱きしめたい衝動に駆られていた。もちろんそんな事はしなかった・・・。

葉月に軽蔑されなくなかったから。

それにそんな勇気もなかったし・・・

第二章：三人の日常

「涼？どうしたの？」

葉月はぼんやりとしていた俺の顔を覗きこんできた。
いつも思うけど・・・

こいつってほんと無防備だよな。

「・・・葉月、キスしてほしいのか？」

まるで子供をからかうように言うと葉月の顔はみるみる内に赤くなる。

「なっ・・・ばっ、ばっかじゃないの！？そ、そんな訳ないじゃんっ
！！！」

どもってやんの～
ほんとからかいがいのある奴だよな。

「涼。あんまりからかうなよ。」
そう言いながら顔が笑ってるぞ、慶。
まあ当たり前か。

「慶。ちゃんとチェックしろよ。」

「わかつてるよ。」

そろそろ来るな。葉月の蹴りが・・・
キター！！

「涼なんて大っ嫌い!!」

見かけによらず強い蹴りの葉月をなんとか鞆で
防御。

葉月は怒って大分前を歩いている。

「涼、今日ピンクのギンガムチェックだった」

「まじっ!? 新作じゃん!

くそ、俺も見なかった」

まあ男ならわかると思うけど・・・いわゆるパンチラってやつ?

葉月は体育のない日、スカートの下になにもはかないから見れちゃうって訳で。

慶が蹴りをくらって俺が見れる日もあるんだけど・・・

葉月にはれたら絶対殺されるだろうな・・・

まあほどほどにして事で

俺達はいつもこんな風にはしゃいで騒いでいた。それが当たり前
の日常で今まで少しも変わった事なんてなかった。

でも・・・

俺達が変わり始めたのは一年後の同じ始業式の朝から・・・

第三章：最後の思い出

高三の春 -

始業式の朝

空気が重い。

なんなんだ一体・・・

待ち合わせ場所からこの見慣れた桜並み木までの間、俺達は一言も会話を交わしていなかった。

こんな事今までの俺達にはなかったのに・・・

いつもの葉月ならこの桜を見てはしゃいでいるはずなのに。

慶が俺かが葉月をからかってパンチラをする事もなく、俺達は歩いていた。

「なあ！今日さ、始業式が終わったら海にでも行かねえ？」

そう提案したのは俺だった。

でも提案して良かったと思う。

これが、三人で笑い合えた最後の思い出になったから・・・

始業式を終えて俺達は海に向かった。

でも途中でご飯を食べたり、葉月が買い物をしたりで海に着いたのは

夕方になっていた。

「海だゝ・・・。」

「慶、テンション低くすぎ。」

「人の事言えんのかよ。」

大体、葉月が買い物しすぎなんだよ。」

「そんな事ないもんっ！」

いや、そんな事ある。

葉月の買い物で大半の時間を費やしたし

その証拠に葉月の両手は荷物でいっぱいだしな。
海にそんなものは必要ねえ。

「とりあえず、砂浜に座ろうぜ。」

俺達は砂浜に腰掛け、

少しオレンジ色に染まり出した海を見つめていた

「今日は来て良かったな。なんかいつもの俺達に戻ってきたし。」

慶と葉月は、
「そうだね」と笑った。

「涼っ」海の水冷たいか確かめようぜ。」

「おっ！いいねえ。」

そう言って俺らは二人で海に向かった。
でも水の冷たさを確かめるのは嘘。

俺達是这样言つて、どちらかを海に落とし
結局二人共海に落ちる。
つというのがいつもの事だった。

今回も結局そうなった。

「冷てゝ！！さみゝ！！！」

「ありえねえゝ！！！！！」

言いながらまた海に落とし合う。

「葉月も来いよゝ！！！」

俺がそう誘つてもお前は結局来なかったよな。
でも砂浜に座つてオレンジ色に染まる葉月はすごく綺麗だった。

顔は光に照らされてよく見えなかったけど・・

お前は泣いてたんだな。
でも俺達はそんな事に気づきもしなかったんだ・・

第四章：涙の雨

時期は過ぎるのが早く

季節はもう梅雨になっていた。

あの海から俺達は委員会やバイトなどですれ違いが多く、あまり話さなくなっていた。

でも嵐のようなどしゃ降りの雨の日にそれは起きた・・・

「・・・嘘だろ。」

俺はその日委員会があつて二人に先に帰ってもらっていた。

思ったより早く終わって学校を出て家に帰っていた俺は近所の公園の前を通り過ぎようとしていた。

誰もいないはずの公園には二人の男女が1つの

傘の中で抱き合っていた。

そしてそのままキスしてお互い見つめ合っている

ただのカップルなら見て見ぬフリで通り過ぎるだろう・・・でもそんな事できるはずもなかった。

「慶・・・？葉月・・・？」

それは俺のよく知っている人物だったから
俺は手に力も出ず傘を落としていた。

初めに気づいたのは葉月だった。

目は見開かれて動揺してるのが見てとれた。

そんな葉月の目線を追うように涼が後ろを振り向いた。

「・・・涼・・・」

口の動きでわかる。

慶は俺の名前を呼んだ。そして、俺の元に近づいてきたけど、俺は
とっさに方向を換えて逃げ出していた。

早く立ち去りたかった。

「涼っ!!」

慶が呼び止めたのは知っていた。

でも俺はどうしようもなく混乱してただ立ち去りたかった。

現実から逃げたかった・・・

いつだって三人でいるのが当たり前でこれからもずっとそうだと思
ってた君を見つめる目が俺と同じだったあいつ

違ったのは告げた勇氣。

嘘だ！

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ
「嘘だ！！！」

俺は通学路途中にある土手に着いて大きな声で 叫んだ。
雨ですっかり濡れた服も気になる事もなくて、
たださっきの映像が頭の中でぐるぐる回っていた

「信じたくねえよ……。」

俺は泣いていた。

何も考えたくない……
もう笑えねえよ……。

土手の所に腰掛けていた俺の周りには誰もいなかった。
雨の世界の中で俺は一人ぼっち……

でも今はそれがとても
心地よかったんだ……。

第五章：現実

- 謝らなくていい

「これからも友達」

それはそう嘘じゃないけれどプライドじゃない もう会えないよ・
・-

雨に一晩中打たれた結果高熱を出して寝込んでしまった。

まあ・・・

当たり前か・・・。

母さんはかなり怒りながら俺の看病をしてくれ
少しましになった。

でもまだボ～っとするし頭も痛い。

2コ下の妹も俺を心配して見に来てくれた。
いつも口うるさい妹も今日は違っていた。

「お兄ちゃん。

どうしてあんな雨の中

傘もささずにいたの？

何かあった？」

さすが妹。

母さんにも同じ質問をされたけど、俺は答えなかった。
やっぱり何かわかるんだろうか・・・？

「お前さ、もし自分の大事な人を失う事になったらどうする・・・」

頭は少しぼくっとして

うまく言えたかどうか分からないけど

妹は少しうつむいていた「私は・・・ううん・・・
やっぱりよくわからないや。ごめん・・・。」

「・・・ゴホ。

いやいいんだ・・・。」

そうだよな。

わからねえよな・・・

俺だってわからねえよ

でもこれだけはわかる。もう・・・

もうあの頃には戻れねえって事だけ・・・。

2日後

俺はもうほとんど完治していたけど、大事をとって今日はもう1日
だけ学校を休む事にした。

学校休むって結構気分

いいよなあ♪

俺はベッドの上で寝転びながら音楽を聴いていた

その時部屋のドアが開いて目の前には慶と葉月が立っていた。

なぜだかあの時の記憶が蘇る・・・

俺は耳からイヤホンを外してベッドから起きたあがった。

「・・・涼・・・すげえ熱出したってきいて・・・
大丈夫か？」

何だよ。

体調が悪い時でも大声出して、俺にタツクルしたりしてくるくせに・
・・・。

そんな怯えた目で小さな声で・・・
まるで慶じゃねえみていだ。

それに葉月だって、妹より口うるさく俺に説教するくせに。
「傘ちゃんとさしなさい」とか言うだろ？

なのに、今日は随分
大人しいじゃねえか。

イライラする・・・
もううんざりだ・・・

「出てけよ。」

「・・・えっ？」

慶が俺に疑惑の目を向けた。

「出てけって言ってんだよっ！！！！
お前らの顔なんか見たくねえんだよ！
うぜえんだよ！消えろ！！！」

目の範囲にあったCDを俺は手に取り壁に向かって投げた。
CDはパリ・ンという音と共に粉々になった。

「涼っ！話がしたいんだ！」

「話？葉月とめでたく付き合う事になりましたっつてか？
別にどっだっていいんだそんな事はっ！！」

・・・そうなんだよ

別にどっだっていいんだそんな事。

慶は俺の言葉に少し
驚いていた。

そうだろうな・・・

俺はあの葉月を「女」として見るようになった事を慶に言っていた。
その時の慶は少し笑っていて「そんなもんか」
と言っていたっけ。

だからお前は、俺がこんな風に怒ってるのは葉月と内緒で付き合っ
ていたからと取るだろうな・・・
違うよ。

そんな事別に構わなかった。
もちろんくやしだよ・・・けど、それは葉月が選ぶ事だ。
だからいいんだよ
そんな事・・・ー

「俺は・・・お前を親友だと思ってた。もう家族だって・・・
慶には何でも話してた。でも、お前はそうじゃなかったんだ・・・
」

慶は大きく目を見開いて目に涙を溜めながら
首を横に大きく振って、必死で訴えていたけど 言葉にはならない
みたいだった。

分かってるよ

違うって言いたいんだろ

でも何が違うんだよ・・・もう遅いんだよ・・・

葉月は泣いていた。

俺は呆然と立ち尽くす慶を押し出してドアを閉めた。
それから、しばらくして階段を降りる音が
聞こえた。ー

ー守れるものは一つもないのかな？

果てしなかった空が今日は低い・・・

明日が見えない

それでも

NEVER MINDー

第六章：痛み

俺は次の日学校に行く支度していた。でもいつもより早く・・・下に降りるともう朝食はできていた。

相変わらず早いな
母さんは。

「おつ、涼か。
久しぶりに顔見せたな」

そい言ったのは出張などで家が留守がちの
父さんだった。

ほんとに久しぶりだな・・

「父さん髪薄くなってきたんじゃないかねえの？」

「はは、久しぶりの第一声がそれか？
熱出したって言ってたから心配してたが・・
大丈夫みたいだな。」

そう言つて父さんは
笑っていた。

でもすぐに新聞を畳んで家を出ていった。

「涼、今日は早いね〜
だからこんな大雨なのかしら？
ああ〜嫌だわ。」

「あんな、別に俺のせいでもねえだろうが。
じゃ行ってくるわ」

「朝ご飯食べないの?!」

「ちょっと食欲ねえんだ」

「・・・そう。」

行ってらっしゃい。」

いつもうるさく文句を

言う母が今日は何も言わなかった。

やっぱり昨日の話し

聞かれてんたんなか?

学校の休み時間、昼休み、俺は他の男友達といた。

もちろん慶とも廊下で

すれ違ったけど俺は見えて見ぬフリをしていた。

でも、いつまでもこんな風にしてたらだめだな

俺だっていつまでも

こんな・・・

吐き気がする。

放課後

俺は携帯に電話を掛けた

「今日、俺ん家来れる?」

「・・・おう。」

「葉月は俺が呼ぶから。」

慶の声はかすかに震えていた・・・

「わかった。」

涼・・・ほんとに「ごめん。」

俺は何も言わずに電話を切った。

涼の「ごめん」なんて何年ぶりに聞いただろう・・・

俺は次に葉月に電話を掛けた。

二回のコールですぐに繋がった。

「涼？」

「俺以外にないだろうが」

「うん。そうだよな」

相変わらずの天然だな

それとも、もう俺から電話なんてないと思ってたのか？

「今日さ俺ん家に来て

欲しいんだ。

来れる？」

「うん、行く。」

「そっか。」

じゃあ待ってるからな」

「涼・・・」

葉月が何か言いかける前に俺は電話を切った。
どうせわかってる。

「ごめん」の一言があつた事ぐらい・・・

そんな事聞きたくない

頼むから思わせないでくれよ・・・

お前らと親友じゃなきゃ良かったなんて思いたくない・・・
いつそ・・・

出逢わなきゃよかった　なんて思いたくない。

そんな残酷で悲しい事　感じたくないんだ・・・部屋の中には俺と
慶と葉月がいた。

三人が円になるように

床に座つて黙り込んだまま、もう10分も経つ。

「涼・・・俺達これからも
親友だよな？」

先に口をわつたのは慶
だった。

これからも友達か・・・

「涼さ、去年のクリスマスの時バイトだったろ？
その時俺の家で葉月と
ケーキ食べたりしてさ・・・でも・・・その後・・・。」

慶は言いにくそうだったけど、つまりSEXしたって事だろ？
まあ、男女二人なんだよな・・・一応。

葉月の初めては慶か・・・慶の初めても葉月・・・

って何考えてんだ俺は。
冬休みはバイトに明け暮れていたから気づくのが遅かったのか・・・。

「涼・・・俺達ずっと親友
だよな・・・？」

「・・・・・・・・・・。」

外は雨。

俺の心の雨もいつか止むかな？

心が痛い・・・。

いてえよ・・・。

俺はまだ子供でこんな　ささいな事や裏切りを　許せるほど大人に
はなれなかったんだ・

明日には雨もきつと上がるだろう・・・

そして僕はもつと強い　はずだよ・・・

いつの日かまた笑って　会えるだろう・・・

それが大人になること

NEVER MIND

俺の家を出て、二人は家に帰っていった。

二人の間にどんな話が　されていたのか俺は知る事もなかった。

「葉月、家まで送るよ。」

「・・・ありがとう。」

慶・・・・・・・・少し話してもいい？」

「ああ。．．いいよ。」

「私ね、涼の事も慶の事も好きなの．．。
どっちななんて選べないクリスマスのはきつとどつかしてたんだ
と思う私．．慶とは付き合えない。」

葉月の目に涙が溜まっていく．．

「うん。葉月がそういう風に思ってるのはなんとなくわかってた．．
．．」

葉月は歩く足どりを
止めた。

慶もフツとそれに気づいて、葉月の前の方で足どりを止めた。

「私達、ほんとバカだよね何してるんだろ．．．」

葉月はドサツとその場から崩れ落ちた。
さしていた赤い傘も落ち座り込んだ葉月の体に 容赦なく雨が降り
かかる

「葉月!？」

慶は心配してしゃがみこんで葉月に傘を差し出すでも葉月はそれを
払いのけた。

「葉月．．．?」

「涼もこんな気持ち」

だったのかな・・・？こんな風に雨に濡れて、どれだけ痛かったのかな？

どれだけ苦しかったんだろう・・・。」

葉月の大粒の涙も雨と一緒に頬を何度も流れた。

第七章：雨の終わり

慶も傘をささず雨に濡れ葉月をじっと見ていた。

「もう・・・戻れねえんだよな・・・。」

いくら泣いても　いくら嘆いても　もう戻れない。過去の過ちを悔いても　何の意味ももたらさない

そんな事わかってるはずなのに・・・

どうしてこんなに・・・

涙が溢れて止まらないんだろう・・・。

家に入ると、玄関には妹が立っていた。

とても真剣な顔をして、今にも俺につつかかってきそうだった。

「どうした？そんな怖い顔して・・・。」

俺がそう声をかけると、妹の顔はみるみる内に　泣き顔に変わった。

「・・・そんなあっけなく終わっちゃうの？

あんなに・・・大切だったじゃん・・・。」

お兄ちゃんの宝物みたいなものだったはずでしょ！？！　そんな・・・こんな・・・あっけないの・・・？」

妹の顔から涙がこぼれていって、俺は胸を貸してやる事しかできなかった

なんでお前が泣くんだよ

大丈夫だよ・・・

また笑って会えるようになる・・・。

ありがとう・・・

俺の代わりに泣いてくれて・・・！

それから季節は

あつという間に過ぎた。

試験や就職・・・

ほんと時なんてあつという間だな・・・。

俺達の卒業式は2月で まだ寒い中行われた・・・

三人共無事卒業で俺達は学校を出た。

もちろんあの雨の日から俺達は顔を合わせる事もなかった。

けど、今門を通った所で三人共立ち止まっていた

門を出た後の通学路は 三つの道にわかれている

普段は一つの道の方で

三人で帰る。

でも今日、三人共別々の道から帰る事になる。

結局葉月に「好きだ」と伝えられなかったな・・・今日は俺

達の終わりに ふさわしい 雨。

少しあの時の痛みが

舞い戻ってくる。

雨が雪へと今もし変わったなら想いのすべて言葉になりそう・・・

哀しく笑った

あいつも君も俺も・・・

それはなんて切ない強さ

傘が咲く三叉路で

「またね」

と別れた・・・

大丈夫・・・

もう涙は出てこない・・・。やっと・・・

歩き出せる・・・。I

f i n

第七章：雨の終わり（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。携帯からの初投稿でまだまだ未熟な点がいっぱいあったと思います

私はテゝマと言うものを決めてお話しを書いています。

今回のテゝマは

「些細なきっかけから起こる悲しい過ち」
でした。

それでは次回作の

「始まりと終わり」も

読んでもらえたら嬉しいです

凜でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0532b/>

NEVER MIND

2010年12月15日14時25分発行